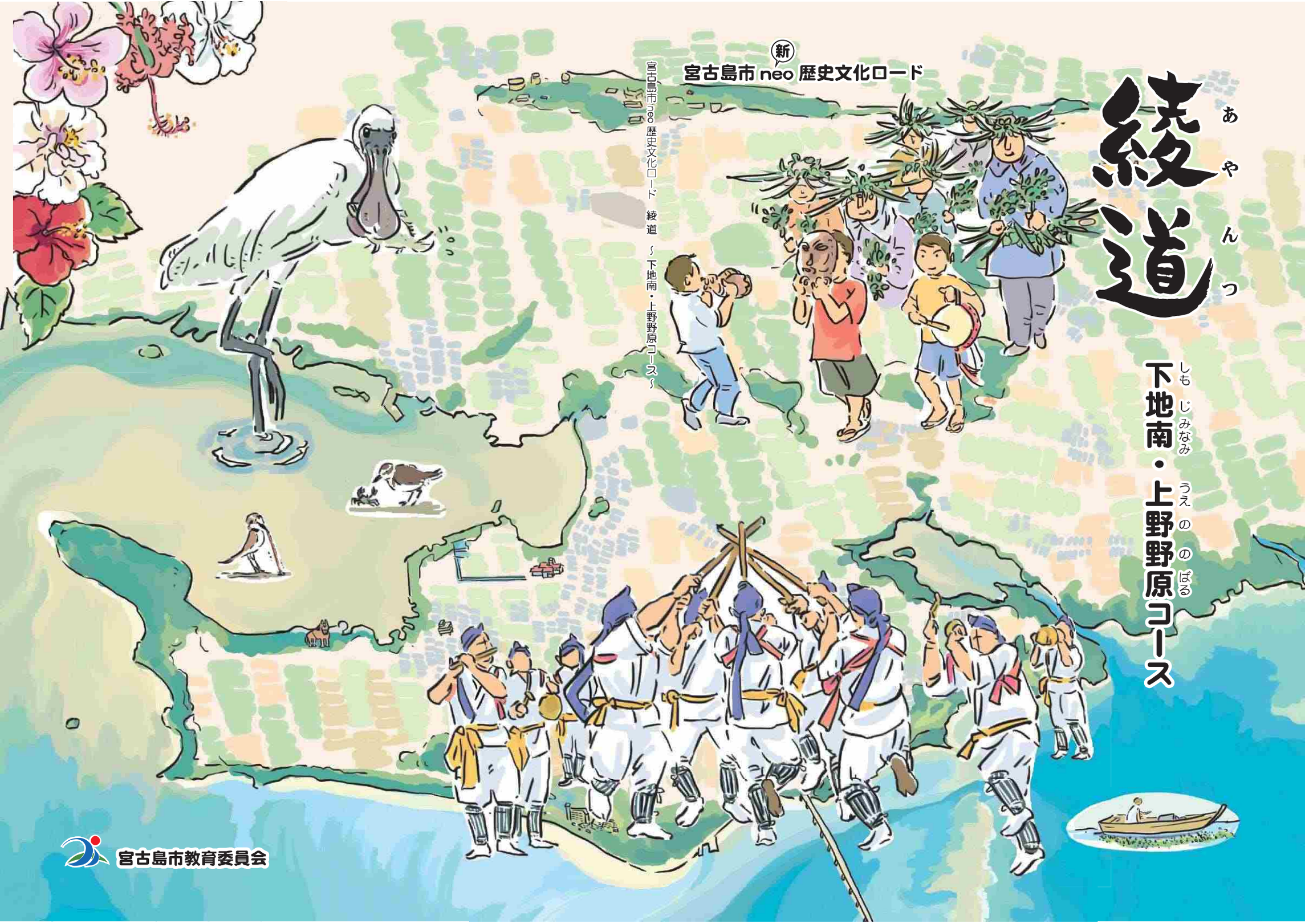
宮古島市neo（新）歴史文化ロード

宮古島市neo歴史文化ロード　綾道　～下地南・上野野原コース～

綾道（あやんつ）

下地南（しもじみなみ）・上野野原（うえののばる）コース



宮古島市教育委員会

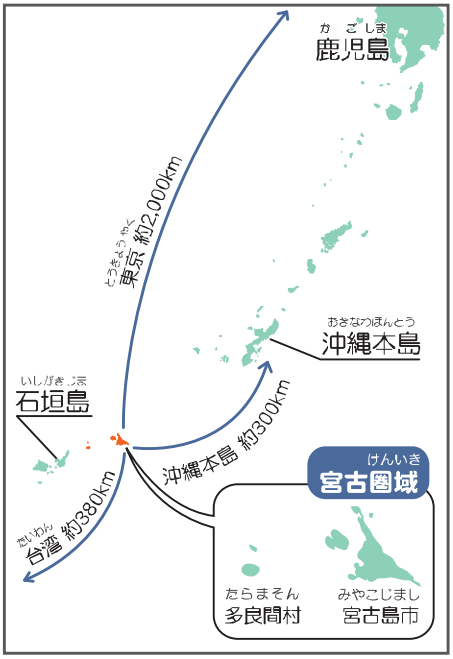
綾道
あやんつ
おもむき　みち　みやこじま
「趣のある道」のことを、宮古島のことばで「あやんつ」といいます

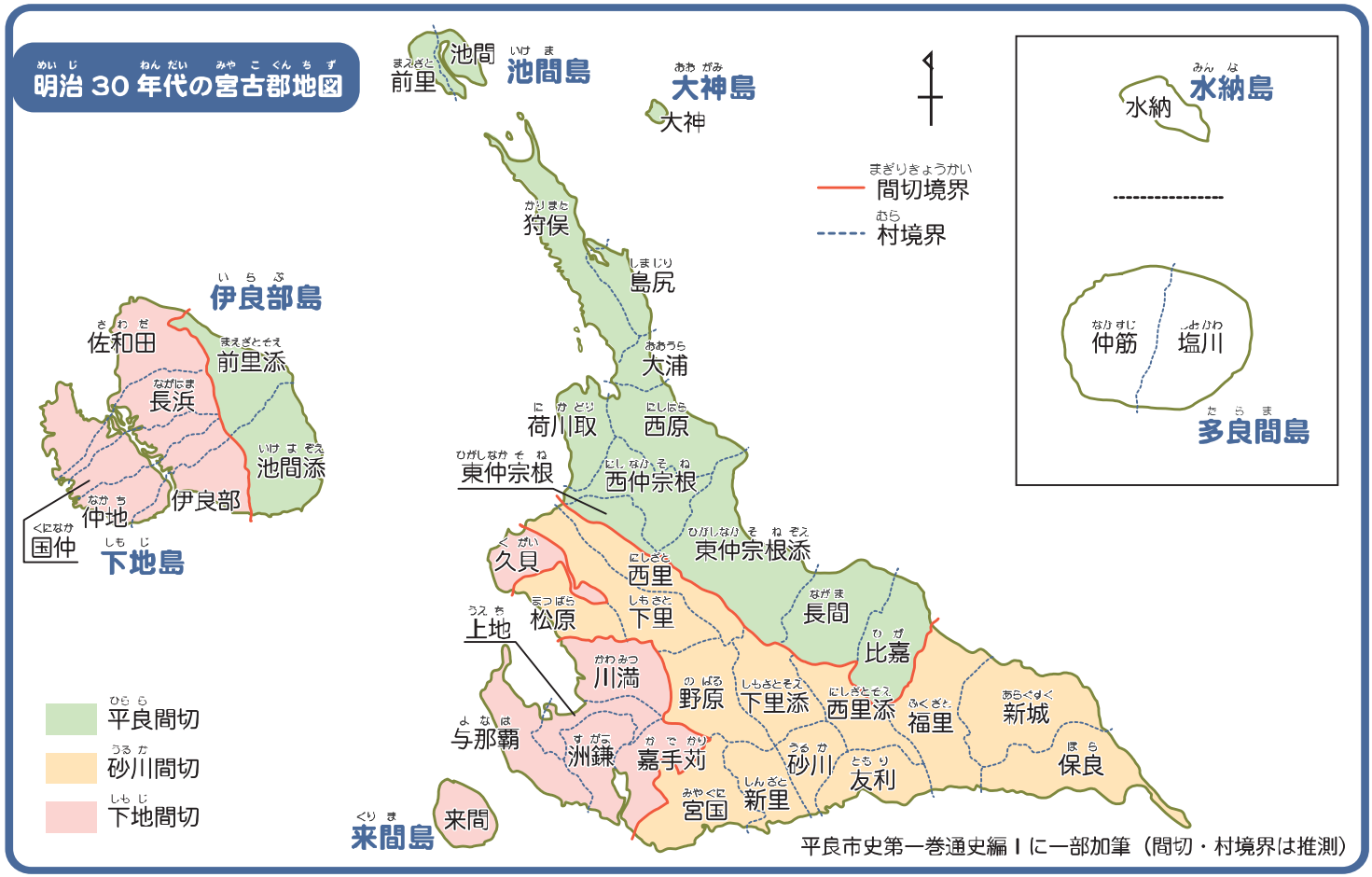
宮古島市の位置と面積

宮古島市は大小6つの島（宮古島、池間島、大神島、来間島、伊良部島、下地島）で構成されています。

総面積は204キロ平方メートル、人口約5万5,000人で、人口の大部分は平良地区に集中しています。

島全体がほぼ平坦で、山岳部や大きな河川もなく、生活用水などのほとんどを地下水に頼っています。




明治 30 年代の宮古郡地図
池間島
前里
池間
大神島
大神
間切境界
村境界
水納島
水納
仲筋
塩川
多良間島
狩俣
島尻
大浦
荷川取
西原
東仲宗根
西仲宗根
東仲宗根添
伊良部島
佐和田
前里添
長浜
池間添
伊良部
仲地
国仲
下地島
久貝
西里
下里
上地
松原
長間
比嘉
川満
野原
下里添
西里添
福里
新城
与那覇
洲鍬
嘉手苅
砂川
友利
保良
宮国
新里
来間
来間島
平良間切
砂川間切
下地間切
平良市史第一巻通史編Ⅰに一部加筆（間切・村境界は推測）

宮古島市neo歴史文化ロード　**綾道（下地南・上野野原コース）**

※御嶽は祭祀などを行う大切な場所です。神聖な場所なので入らないようにしましょう。

宮古島市の位置と面積 02
明治30年代の宮古郡地図 03
散策マップ(下地南・上野野原コース) 06

下地南コース

下地、上野の成り立ち 08
川満の棒踊り　市指定 無形民俗文化財 09
川満の棒踊りの始まり 10
宮古の高千穂、佐渡おけさ 11
下地のヨーンシー 12
河充氏の系図　市指定 古文書 14
下地の偉人、川満大殿 15
古墓を抱くアコウ　市指定 天然記念物(植物) 16
アコウとガジュマル 17
与那覇支石墓　市指定 史跡 18
与那覇ばらの一団と下地与那覇の関係 19
与那覇湾、今むかし 20
ラムサール条約と与那覇湾 22
サキシマスオウノキ　市指定 天然記念物(植物) 24
ぷかぷか浮かぶ！？ サキシマスオウノキ 25
トマイ御嶽の植物群落　市指定 天然記念物(植物) 26
前山御嶽の植物群落　市指定 天然記念物(植物) 27
「乾隆三十六年大波」碑　市指定 史跡 28
下地の津波伝説 29
赤崎御嶽　市指定 有形民俗文化財 30
赤崎御嶽の粟占い 31

もくじ

入江湾、今むかし 32
川満亀吉と人頭税廃止運動 34
クバカ城跡　市指定 史跡 36
クバカ按司のおもしろ伝説 37

上野野原コース

散策マップ(上野野原コース) 38
大嶽城跡　市指定 史跡 40
農業神になった男　ピギタリ 41
大嶽公園の植物群落　市指定 天然記念物(植物) 42
野原岳の霊石　県指定 史跡 43
野原のマストリャー　国選択 無形民俗文化財・市指定 無形民俗文化財 44
満月の下のマストリャー 45
宮古島のパーントゥ(野原のサティパライ)
国指定 重要無形民俗文化財・ユネスコ無形文化遺産 46
サティパライ＝里祓い 47
宮古上布　国指定 重要無形文化財 48
苧麻糸手績み　国選定 保存技術 49
織物まめちしき 50
ピンザアブ遺跡　市指定 史跡 52
日本で発見された旧石器人骨 53
野原鏡原のイヌマキ林　ふるさと文化財の森 54
宮古島市のシンボル 55
宮古馬　県指定 天然記念物(動物) 56
日本在来馬・宮古馬 57
台風銀座 宮古島 58
宮古の人物年表 60
文化財の体系図・一例 62

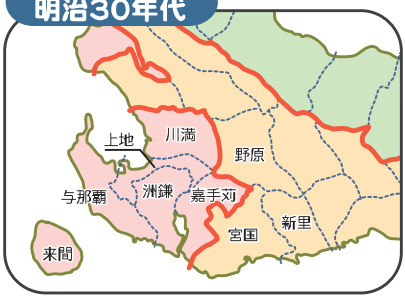
下地南・上野野原コース

コース全長約26km
所要時間:車で2.5時間

※集落内の拝所に許可なく立ち入ることは禁じられています

下地、上野の成り立ち

明治30年代



平良間切　砂川間切　下地間切

間切は琉球王国時代の行政区分のひとつで、平良、下地、砂川間切の３間切および多良間島の43か村があった。

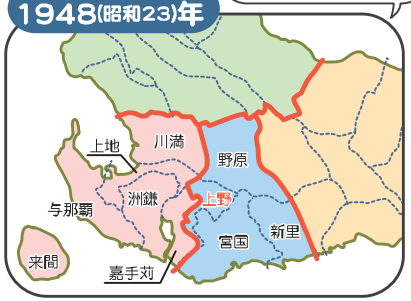
1908(明治41)年

平良村　城辺村　下地村

1908年に沖縄県及島嶼町村制が施行。宮古郡は平良村(多良間島含む)、下地村、城辺村、伊良部村の４村に編成された。

1948(昭和23)年

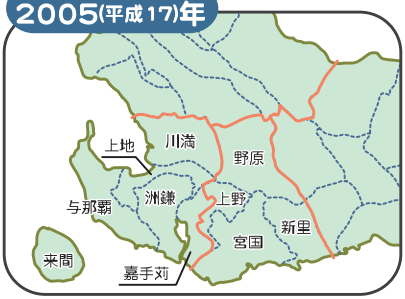
新里＋野原＋宮国＝新野宮(仮)
→向上の意＋野＝上野



平良市　城辺町　下地村　上野村

1948年、下地村から、野原、新里、宮国の３か字と、字嘉手苅の一部(字上野)が分村し、新しく上野村が誕生。

2005(平成17)年



宮古島市

2005年、平良市、城辺町、下地町、上野村、伊良部町の５市町村が合併し、宮古島市が誕生。宮古郡は多良間村１村のみとなった。

市指定 無形民俗文化財　1981年(昭和56)年2月17日指定

川満の棒踊り

川満の棒踊りは、ふたりが激しく打ち合う二人棒と、５人が勇ましいかけ声で棒を振り上げる五人棒があります。棒踊りの始まりは、川満村が村立てされた1686(康熙25)年頃と伝わりますが、詳細ははっきりしません。以前は２、３、５、６、10人棒の５種類があったとされますが、現在は２種類が川満棒踊り保存会によって継承され、集落の繁栄と無病息災を願い、新年会や敬老会で披露されています。

川満の棒踊りの始まり

マムヌ(魔物)退治がきっかけ

1686(康熙25)年、川満村で疫病が大流行し、多くの村人が亡くなりました。村の長老たちが神女にうかがいをたてると「村の全ての御嶽に願いをかけよ」と告げられます。村人たちは手に手に棒を持ち、鉦を叩きながら御嶽をまわりました。すると最後列にいた老婆が「マムヌが舌を出してばかにしたように笑っている！疫病はこれの仕業だ！退治せよ」と叫びました。村人たちはマムヌを取り囲み、持っていた棒で見事撃退しました。こうして疫病は収まり、人々は安心して暮らしました。

参考:『村の文化財を守る』
川満棒踊り保存会(2001)

目黒盛豊見親の政策

その背景？

14世紀後半、宮古統一を成し遂げた目黒盛豊見親は、長く続いた戦いで荒んだ村人たちの心を落ち着かせるため、昔から大切にされていた御嶽を補修し、祭祀などを盛んに執り行うことに力を注ぎました。そしてこれまで戦うために伝えられてきた武術を、娯楽として披露し、村人たちを楽しませました。

これが農村演技として今の「棒踊り」という形で残ったのではないかとも言われています。

参考:『平良市史第一巻通史編I』
平良市史編さん委員会(1979)

宮古の高千穂、佐渡おけさ

下地字川満に高千穂と呼ばれる集落があります。その昔、川満から分字するとき、「宮崎県の高地に高千穂というところがあり、この集落も下地の高いところにあるから、高千穂とつけた」という古老の話が残っています。

また、高千穂集落では「佐渡おけさ」という踊りが戦前から踊られています。集落の人が本土から習って教えたと伝わっており、曲も歌詞も佐渡おけさの要素がよく残っています。そもそも佐渡おけさは九州の牛深ハイヤ節で、北前船の船乗りたちによって伝えられたとされており、ルーツを調べていくと、海を通じて様々な交流があったことがうかがわれます。

下地のヨーンシー

下地のお祭りなどで、「下地のヨーンシー」という踊りが、洲鎌、上地、与那覇の３集落によって披露されています。ヨーンシーは、沖縄県の国頭地方に伝わる「国頭サバクイ」という木遣り唄が元になっています。木遣りは「木を運ぶ」という意味で、重い木や石を大勢で運ぶ際に息を合わせるためのかけ声代わりとして唄われた労働歌です。

「国頭サバクイ」は、木を切り出したあと、浜まで運び出すまでの一連の様子を歌の中で表現していますが、下地のヨーンシーは、洲鎌集落が木を切り出し、上地集落が切り出された木を運び、与那覇集落が盛大に応援するという形で、一連の動作をそれぞれが同じ曲で踊り分けています。ヨーンシーは、首里城増改築の際に各集落から本島へ駆り出された男たちが習って帰り、広まったとされていますが、３つの集落が分担して踊るようになった理由などは分かっていません。

国頭サバクイ

すがましゅうらく
洲鎌集落

「木を切り出す」

うえちしゅうらく
上地集落

「丸太を運ぶ」

よなはしゅうらく
与那覇集落

「応援する」

河充氏の系図

河充氏は、16世紀前半に下地の首長を務めた川満大殿を元祖にもつ家系です。その子孫である洲鎌集落の松村家がこの系図を保管しています。系図は家譜とも呼ばれ、宮古では18世紀中頃より制作されるようになりました。河充氏の系図は、初代から12代までの生没年月日と役職名などが、字体も筆跡も様々に書き残されています。親雲上、目差、与人などの役職名や、上級神女である大阿母などが記載されており、川満大殿の子孫が様々な時代で活躍したことをうかがわせます。

下地の偉人、川満大殿

洲鎌集落の川満大殿を歌ったあやぐ(古謡)には、「生まれ持った類まれな才知を生かし、さらに血の滲むような努力を続けた」と伝わっています。その甲斐あってか、いつしか仲宗根豊見親の目にとまり、下地の首長に任命されました。これは通常では例のない出世です。

また、大殿は庶民に寄り添う大変慈悲深い人物として伝えられており、人々の暮らしに大きな影響を与えた功績が数々残されています。

1498(弘治11)年には、仲宗根豊見親の命令によりベウツ川の掘割工事を行い、嘉手苅南部の湿地に溜まった悪水を排出して農耕地を開拓しました。そして1506(正徳元)年には、加那浜地域の一大工事に取り組みました。加那浜は海の干満に影響を受けやすく、大雨の後などは水や泥が深く、歩くのに苦労していた一帯だったため、橋道を整備しました。ほかにも八重山の赤蜂征伐や、与那国の鬼虎との戦いに従軍し、戦功を立てた偉人でもあります。

まさに「智・仁・勇」を兼ね備えたといえる川満大殿が妻と共に葬られたミャーカ(古墓の一形態)は、市の史跡として指定されています。

■ 加那浜の橋道(イメージ)

『雍正旧記』より

市指定 天然記念物(植物)　1978年(昭和53)年２月８日指定

古墓を抱くアコウ

上地集落の真中屋御嶽には、推定樹齢400～600年のアコウの大木があります。アコウは傘を広げたように枝葉がぐんぐん成長する木で、根が他の樹木に巻きついて枯らすこともあります。この大木の根元に石棺がふたつあるとされますが、現在は根が絡みつき、ほとんど見えません。

かつてこの一帯を束ねたという屋真とヤマンサの夫婦がここに葬られたと伝わり、御嶽の祭神になっています。

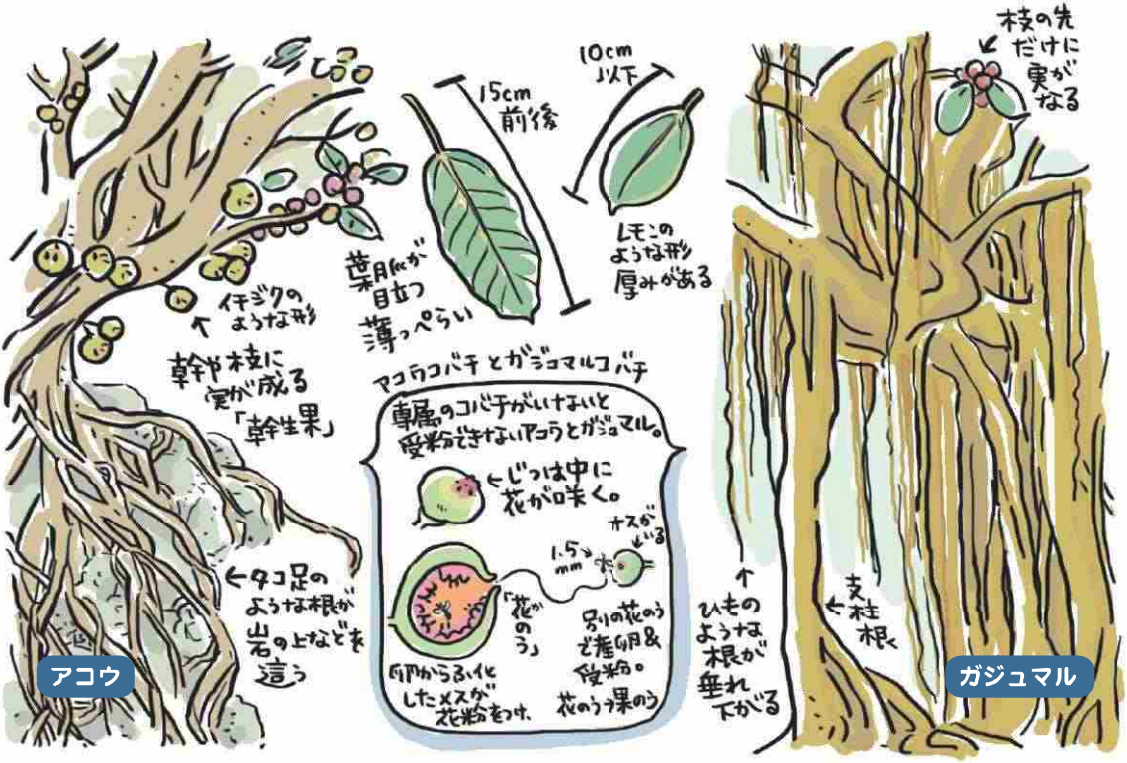
アコウとガジュマル

アコウには「締め殺しの木」という呼び名があります。鳥や樹の上で暮らす動物がアコウの実を食べ、そのフンが枝の付け根や幹のくぼみに落ちて発芽します。地上にむかって気根を伸ばすとき、元々の木に絡みつきながら成長し、最終的に枯らしてしまうことが名前の由来です。

アコウと同じイチジク属の木で、宮古で身近なものにガジュマルがあります。ガジュマルも高い場所からひものような気根をたくさん垂らします。根が地面に達して太く成長すると、支柱根になって木自体を支える働きをもちます。

どちらも気根をもつ木ですが、実(花嚢)と葉を観察する方法で見分けられます。実は、大きさは似ていますが、ガジュマルは葉の付け根に実がなり、アコウは枝や幹に直接実をつけます。葉は、ガジュマルは３～10cmの楕円形で厚く光沢があり、アコウは薄い長楕円形で10～15cmほどです。

またアコウは年に２回ほど一斉に落葉し、短期間で新芽を出す変わった性質をもっています。



市指定 史跡　　1976年(昭和51)年11月１日指定

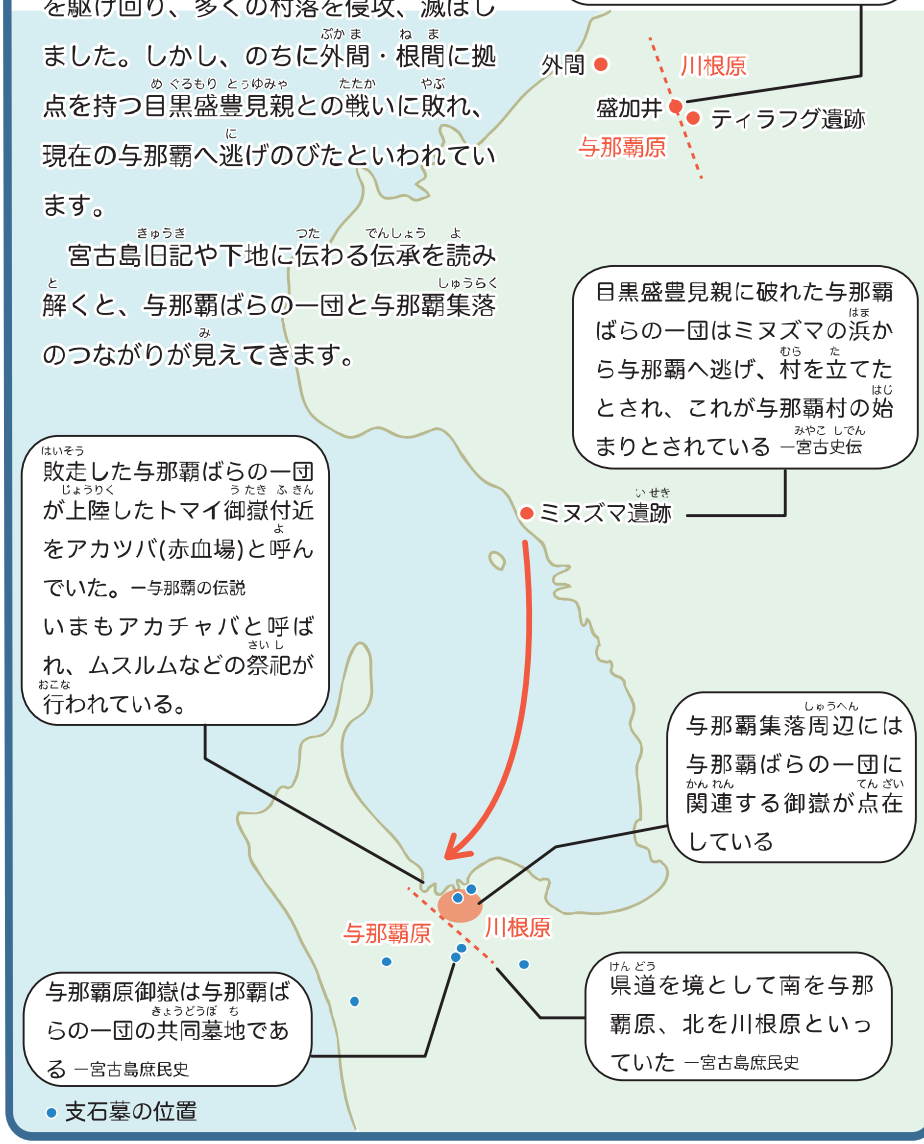
与那覇支石墓

　与那覇支石墓は、14世紀頃、目黒盛豊見親との戦いに敗れ、平良から与那覇に逃亡した与那覇ばらの一団の共同墓地といわれています。この墓は琉球石灰岩が使われ、４本の石の柱の上に一枚岩が載せられています。宮古にはミャーカと呼ばれる独自の様式をもつ古い墓があり、支石墓はミャーカのひとつとされています。与那覇地域にはこの墓と似た形状の墓が数多く分布しています。

与那覇ばらの一団と下地与那覇の関係

14世紀頃にあったとされる戦の時代「与那覇ばら軍」。現在の盛加井一帯に拠点を持つ与那覇ばらの一団は、宮古中を駆け回り、多くの村落を侵攻、滅ぼしました。しかし、のちに外間・根間に拠点を持つ目黒盛豊見親との戦いに敗れ、現在の与那覇へ逃げのびたといわれています。

宮古島旧記や下地に伝わる伝承を読み解くと、与那覇ばらの一団と与那覇集落のつながりが見えてきます。



与那覇湾、今むかし

与那覇湾

ラムサール条約に
登録された面積：704ha（ヘクタール）
干潮時は水路を除く
約400haの干潟になる
（宮古島最大）

久松

久松から川満

「久松の食糧庫」と言われていたよ

公設市場でよく売ったサ

絶滅危惧IA類

大きなヘラのような口

クロツラヘラサギ
（トキの仲間）

元々迷鳥として宮古で確認されていたが
毎年3,4羽飛来。
世界中に400羽ほどしかいない鳥が
3,4羽も見られるのはスゴイこと。

1970~80年代、
約500ヘクタールを
閉じて淡水湖化
する計画があった

与那覇湾で代表的な鳥たち

シギ・チドリは渡り鳥。
日本の湿地や干潟は大事な中継地

オオメダイチドリ　メダイチドリ　シロチドリ

いろんな種が混ざって過ごしている

サニツ、ハマウリ（浜下り）
旧暦3月3日に女性たちが
旧浜に下りて、巡る季節を祝い、
潮で身を清め、潮干狩りなどを
楽しむ伝統行事

このあたりは塩田があった

クイズ浜

サニツ浜

アカフツシナ（ウラギリキガイ）がよくとれた

「パト」と呼ばれる岩
昔の舟着き場だった？

水中駅伝

乗馬体験

宮古馬

宮古角力

人間ばん馬競争

7月にサニツ浜カーニバルが開催される

実は重要！？海草藻場

与那覇湾は、潮下帯を含めると
約900ヘクタールの海草藻場が広がる

↓潮下帯（潮が干いても海中のところ）

与那覇湾は最大水深2m

1970年頃まで回遊していた

カメもよくくる

ジュゴン

★光合成によって二酸化炭素を吸収、酸素を放出

★稚魚や小動物のすみか、隠れ場
★草食動物のエサ場
★産卵場所

★水中からいろいろな物質を栄養として吸収するため、水をきれいにする

までの間はいくつか湧きわくがある
海ブドウはじゅうたんのように生えていて、足にからみつくじゃまなやつだった
投げて遊んでいた
フカイバーには
スヌイ
もずくや
海ブドウ(クビレヅタ)
ンキャフ
がたくさん生えていた
川満
川満のマングローブ
宮古上布の創製者稲石刀良が、サキタガーのわくで糸や上布をさらしていたとも伝わる。
サキタガー
池田橋
チュウシャクシギ
キアシシギ
ムナグロ
沖縄製糖工場
沖縄製糖
創業当時の「台南製糖」のロゴが煙突に残っている
「インガマシー」(岩)
子どもたちの泳ぐ目印だった
イスクマの岸でアーサ(ヒトエグサ)がよくとれた
「イスクマ」(島)
かつてカナハマ橋(パスンツ)がここにあったといわれる
パスンツ
今は埋め立てられている
イキャバル「池原」
子どもが安全に泳げる海だった
ガザミ
旧下地町役場
カッパーガー
水が引きにくく、沼地などが多かったため、生活のしにくさやマラリアのまん延という大変さもあった
学校帰りによくエビやカニ、貝などをとった
マングローブ林が広がっていた
マングローブ林
海底にぎっしり根を張るため、砂の移動を防ぎ、地盤を安定させる
宮古ではアマモ類をザンヌフサ(ジュゴンの草)、ザンヌピギ(ジュゴンのヒゲ)と言う。
生活とジュゴンが密接に関わっていた
ウミヒルモ
ベニアマモ
リュウキュウスガモ
リュウキュウアマモ
ウミジグサ

ラムサール条約と与那覇湾

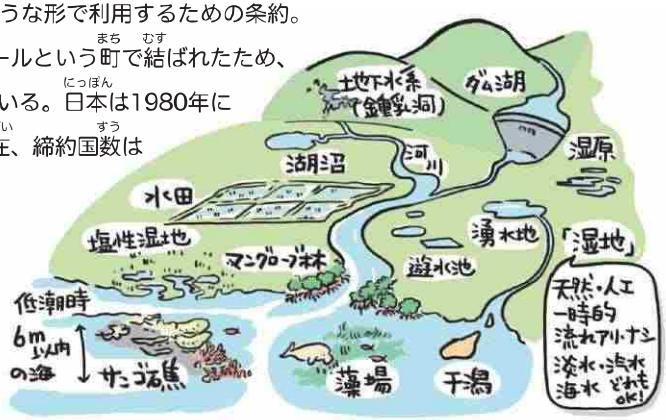
約３年に一度開催

2012年７月、ルーマニアで開催された「ラムサール条約第11回締結国会議」において、与那覇湾が「重要な湿地」として認められ、ラムサール条約湿地として登録されました。

ラムサール条約とは？

正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」。世界の国々が協力して重要な湿地を守り、自然を壊さないような形で利用するための条約。

1971年イランのラムサールという町で結ばれたため、ラムサール条約と呼んでいる。日本は1980年に加入し、2020年２月現在、締約国数は171か国に及ぶ。



湿地とは？

川や湖、干潟、田んぼなど、水で潤っている場所をさす。

ラムサール条約湿地とは？

条約に加入する国が、条約の決めた基準にしたがって重要な湿地を登録すること。

日本で最初にラムサール条約湿地として登録されたのは、釧路(くしろ)湿原。

ラムサール条約の３つの柱

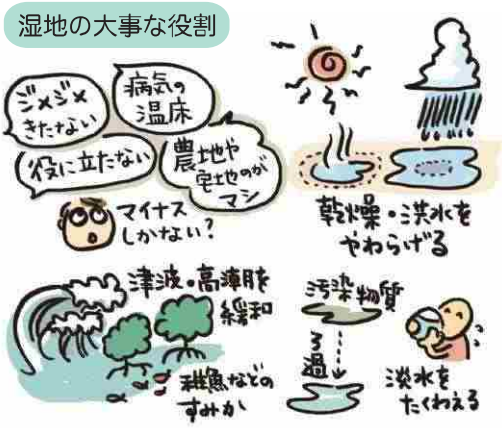
保全・再生

交流、学習・広報

ワイズユース（賢明な利用）

人間の活動を厳しく規制するのではなく、湿地を守りながら活用すること

湿地の大事な役割



与那覇湾のラムサール条約登録

ラムサール条約には９つの基準があり、与那覇湾は下記の３つの基準を満たして登録されています。

１つでも満たせば登録はできる

基準① 特定の生物地理区を代表するタイプの湿地、または希少なタイプの湿地

与那覇湾は４つの湿地を持つ

A:低潮時６m以下の浅海域
B:海洋の潮下帯域(藻場を含む)
E:砂浜海岸
G:干潟

基準② 絶滅のおそれのある種や群集を支えている湿地

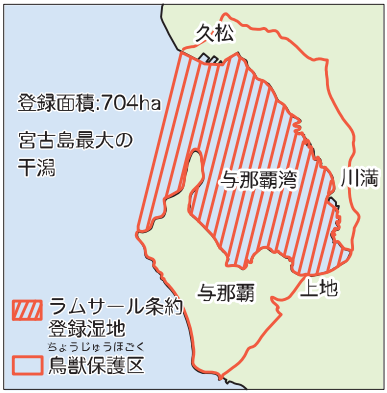
日本だけでなく、世界のシギ・チドリ類の重要な休息地・越冬(えっとう)地。

基準⑥ 水鳥の１種または１亜種の個体群で、個体数の１％以上を定期的に支えている

少なくとも５種を支えている

登録までの経緯

1973〜	大規模な旱魃を機に水源確保のため、湾約500haを締め切り淡水湖化する構想が浮上
1983	反対運動により計画断念
1988〜1997	農地造成のために21.7ha埋立→自生のヒルギダマシ群落、宮古島唯一のフトヘナタリ(巻貝の一種)大個体群が消失
1996	久松漁港整備で８ha埋立
1997〜2005	カニ・エビ、貝類の漁獲量激減、赤土流入 コンクリート護岸により自然海岸が減少→オカミミガイ類(巻貝の種類)の個体群消滅
2010	９月、環境省が「ラムサール条約湿地潜在候補地」に与那覇湾と八重干瀬(やびじ)を選定→条約登録の流れができる
2011	８月、「国指定与那覇湾鳥獣保護区・与那覇湾特別保護地区」の指定に関わる公聴会開催、全会一致で賛成 11月、「国指定与那覇湾鳥獣保護区・与那覇湾特別保護地区」指定→法的条件が揃う
2012	７月、登録認定証授与



参考：宮古島市総合博物館紀要第17号（2013）/みやこの自然（2019）/環境省

サキシマスオウノキ

　サキシマスオウノキは、板根という発達した板状の根をもちます。カーテン状の板根は通気を行ったり、幹を支えて安定させます。国内では奄美大島を北限とし、琉球諸島、ポリネシア、東南アジア、アフリカ東岸の河川や沿岸地に広く分布しています。

　宮古島では、下地地区のトマイ御嶽(与那覇)とツヅ御嶽(上地)に自生しています。

ぷかぷか浮かぶ！？ サキシマスオウノキ

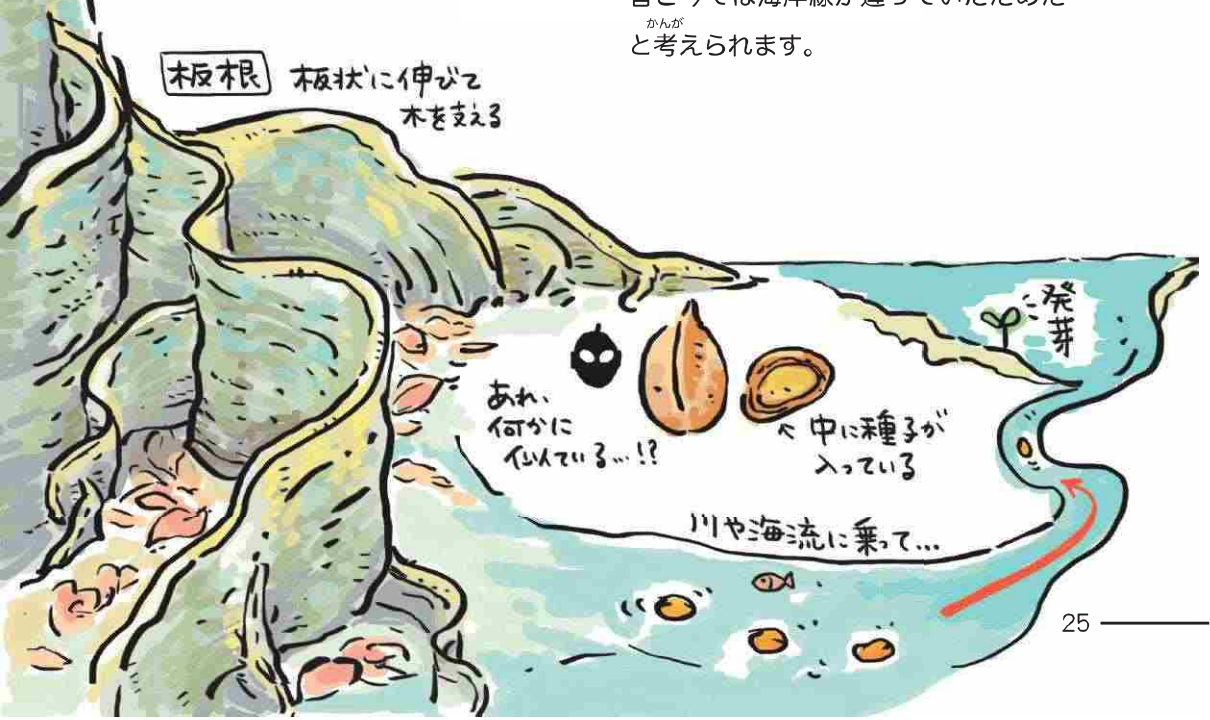
サキシマスオウノキは、国内では奄美大島を北限として、沖縄島や八重山諸島にかけて分布しています。石垣島と西表島には、国の天然記念物に指定された大規模なサキシマスオウノキ群落があります。

サキシマスオウノキといえば、地面からそり立った波打つカーテンのような板根が有名ですが、板根以外に葉と果実にも面白い特徴があります。

サキシマスオウノキの葉は、裏側はくすんだ銀色をしており、表面のツヤのある様子とは全く異なります。

種子を守る果実はとても硬く、すべすべしてツヤがあり、大きさは8cm程度です。硬い果皮と種子の間には隙間があり、水に浮きやすい構造になっています。植物の果実や種子の散布方法には様々な種類がありますが、サキシマスオウノキは「潮流散布」という方法で広がります。木から落ちた果実は、川や海流に乗って浜などにそのままの形で流れ着き、発芽します。そのため、通常は海岸や汽水域、マングローブ林の陸側に群生します。

海岸線から離れている印象があるツヅ御嶽のサキシマスオウノキですが、昔と今では海岸線が違っていたためだと考えられます。



市指定 天然記念物(植物)　1983年(昭和58)年2月4日指定

トマイ御嶽の植物群落

この植物群落は、与那覇集落の北側に位置する与那覇湾に面しています。海抜ゼロメートルの群落内は、湾内に流れ出す土が堆積して肥沃化し、発達した高木林を形成しています。市の天然記念物のサキシマスオウノキをはじめ、高木や低木、カズラ、ヒルギ類など、多種にわたる植物が生え、特異な景観を観察できます。

トマイ御嶽は、与那覇集落の祭祀の中心となる御嶽として知られています。

市指定 天然記念物(植物)　1978年(昭和53)年２月８日指定

前山御嶽の植物群落

この植物群落は、与那覇集落の南西にあり、集落内で一番高い前山という場所にあります。一帯はフクギを中心とした群落が形成され、中には幹周りが約１ｍにもなる大木があります。『与那覇邑誌』(1974) によると、1650(順治7)年頃に、前山に初めてガジュマルが試植され、1742(乾隆2)年にフクギが村垣防護林として集落内の御嶽に植樹されたと記されています。

「乾隆三十六年大波」碑

碑文『乾隆三十六年三月十日大波 宮國新里砂川友利』

この石碑は、1771(乾隆36)年３月10日に発生した地震による大津波の犠牲者を弔ったもので、与那覇集落南西の前山の中にあります。明和の大津波とも言われたこの大波は、宮古で2,500人以上の犠牲者を出しました。特に甚大な被害を受けた宮国、新里、砂川、友利地域から多くの遺体が与那覇前浜に漂着し、集落の人々が合葬したと伝わります。当時の被害を示す、県内唯一の現存する石碑です。

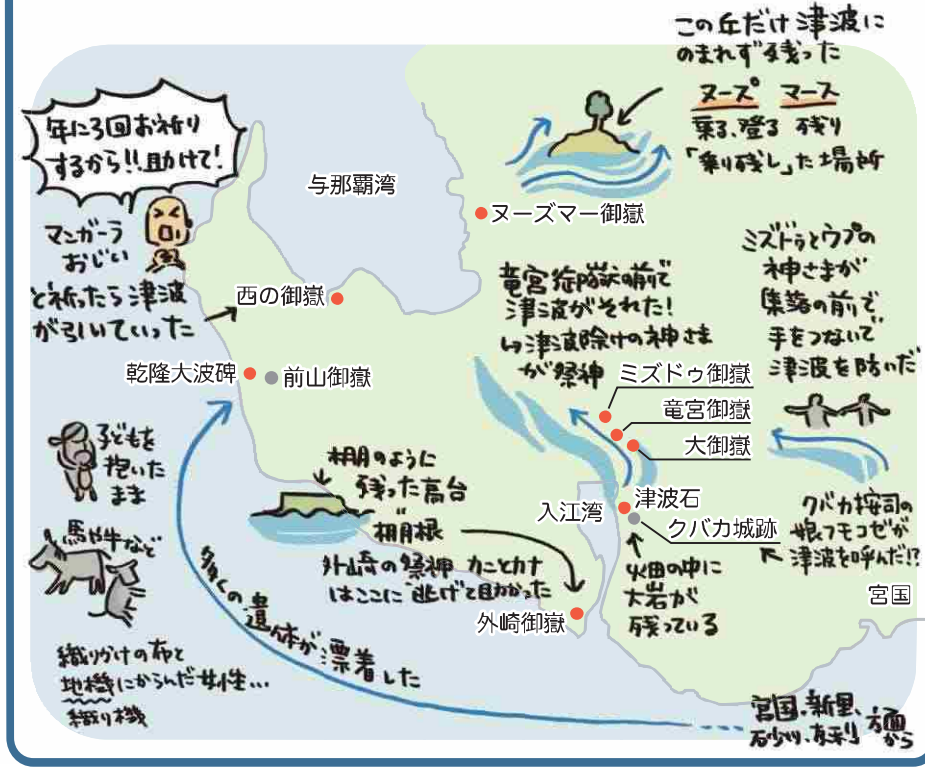
下地の津波伝説

1771(乾隆36)年の地震によって引き起こされた「乾隆三十六年の大波」は「明和の大津波」とも言われ、宮古・八重山諸島に大きな被害をもたらしました。

様々な研究から、宮古にはそれより以前にも何度も大きな津波が襲来したと考えられています。

津波に関する伝説は、『宮古島旧記』などにいくつか残されています。それらの記録を、考古学などの分野と照らし合わせた研究も行われており、14世紀前後と15世紀後半に、宮古に被害をもたらした津波があったと考えられています。また自然科学の分野では、津波石や堆積物の測定から、「乾隆三十六年の大波」以前に８回津波が襲来したとの報告もあります。

下地地域にも、いつの時代の津波か判明しないものも含め、津波伝説がいくつも残されています。



市指定 有形民俗文化財　1981年(昭和56)年２月17日指定

赤崎御嶽

赤崎御嶽は、皆愛集落南東にある赤崎岬の付け根に位置します。祭神は五穀豊穣をつかさどる大世の主豊見親です。『宮古史伝』(1927)によると、子方母天太が生んだ十二方の神々のうちの一神と伝えられます。祭祀は年３回、甲午の日に行われ、３集落(洲鎌、上地、与那覇)の神役たちで行います。

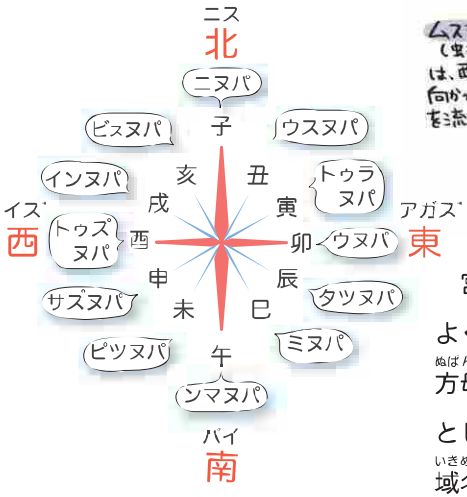
赤崎御嶽にまつわる伝説は数多く残され、古くから大切にされてきました。

赤崎御嶽の粟占い

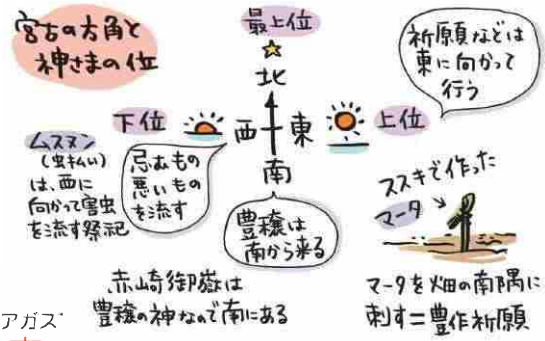
赤崎御嶽の粟占いは、まず洲鎌集落のツカサ(神役)たちが祭祀の前日に収穫した粟を洲鎌のウプンミ御嶽で搗いて粉末にします。その粟から出た糠を使って、年に１度、赤崎御嶽のヌカガーで粟の占いを行います。以前は、下地中学校の側にヌカパリと呼ばれる祭祀用の粟を作る畑がありました。

ヌカガーは岬の波打ち際にある窪地で、満潮時に糠を入れ、糠が水面に浮かぶと豊作、沈むと不作、小魚が集まると子どもに病気が流行り、大きい魚が集まると大人の病気が流行る、また黒いナマコが集まると台風のあたり年などとされます。悪い結果が出ると御嶽に戻って神願いからやり直し、良い結果が出るまで繰り返すため、かつては夜までかかったこともありました。

宮古の方角のはなし



※地域によって発音は多少異なります



宮古では、方言で方角を表すとき、干支がよく使われます。例えば赤崎御嶽の母神、子方母天太は「子方＝北」の神様で、北は神様としては最上位になります。方角は御嶽や地域名に使われることが多く、方角の方言名がわかると、いろんなことが発見できます。